こんにちはセカイ

青銅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こんにちはセカイ

【Ｎコード】
Ｎ６６７３Ｂ

【作者名】
青銅

【あらすじ】
かつてデカルトは言った、『我思う、故に我あり』。だが本当にその『自分』は正しいのか？自分の知識や思考、それら全てはほんの五分前に植えつけられただけで、本当は世界は五分前に始まったのではないか？自分、そして世界とは一体何なのか？舞台は現代。自分から周りの環境を変えようとしない主人公はある日、『世界の異常』を目にする。……たいそうなこと書いてますが、要は現代ＳＦバトル活劇のようなものです。お気軽にどうぞ！

第一話　『クラッカー』Aパート前

『二番乗り場にぃ、電車が到着しまぁす。黄色い線の内側に下がってお待ちくださぁい』

眠たそうな声で、駅の男性職員がアナウンスを告げた。遠くで明滅しているヘッドライト。電車は朝靄の中にそのシルエットを浮かばせていた。そもそも今どき、アナウンスを人にやらせている駅などあまり無い。駅の周囲には閑散とした住宅地や列車の車両センターが見え、ホームには売店の一つも見えない。せいぜい自動販売機が一つか二つ見えるだけだった。駅の屋根は雨のせいかところどころ錆び、年季を感じさせる。そんな寂れた駅のホームに、たった一人、少年が立っていた。

歳は十六ほど。ざんばらの黒髪に無気力な眼差し。顔立ちは整ってはいるが、どことなく暗い雰囲気がする。そんな少年だった。制服を着ているところを見ると、高校生だろうか。少年は近づいてくる電車を特に表情も浮かべず眺めている。

彼の名前は『当麻　宗』（とうま　そう）。県立のいたって平凡な高校所属。数学を除けば、成績は学年で中の下くらい。スポーツも得意でなく、部活にも入っていない。何かの賞なんて生まれてこのかた一度も取ったことない。

人生なんて終われば何も残らない。無だ。それに頑張って何になる？……というのが宗の持論だった。

電車がいつものように宗の前に停まる。

いつものようにドアが開き、いつものように割と空いた電車に乗り、いつものように窓際三番目の席に座る。いつものように学校に近くなれば満員になるんだろうな、と宗は思った。

結局同じことのくりかえしだ。人生なんて。

窓から過ぎて行く、自分がいた駅のホームを眺めながら宗は眠りについた。

宗は夢を見た。いつも見る夢だ。自分の両親が死ぬ夢。いや、『死んだ時の夢』と言うべきか。

宗に両親はいない。四年前に宗一人を残し、二人とも死んでしまった。

だからといって、宗はそれを悲しいと思ったことは無かった。

自分は一人でも生きていける。宗は常に自分に言い聞かせている。現にこれまでもそうだったから。

ふと、横に誰かが座るのを感じ、宗は目を覚ました。

横を見ると、そこにはよく見たことのある顔。

「あ……宗くん、起きちゃった？　……ごめんね」

話しかけたのは高校生、それも女子だった。ごく普通の感じの娘。長い黒髪に優しそうな瞳。そこまで美少女というわけでは無かったが、誰とでも仲良くなれそうな親しみのある風貌だ。

だが宗にとっては違った。

またこいつか。宗はそんなことを考えながら、窓の外を見て言った。

「……何」

それを聞いて慌てる少女。

「いや、別に用事は無いんだけど……」

「なら、話しかけるなよ」

宗は抑揚の無い声で言い放つと、再び寝る姿勢に入った。

沈黙。電車が揺れる音だけがリズムよく聞こえる。

「宗くん……、もう話してくれないの？　昔みたいに……」少女が呟いた。

その話はやめろ。宗は心の中で叫んだ。

「宗くん、学校じゃいつも、」

宗は突然立ち上がり、そして少女を激しく睨んだ。その話にはいい加減うんざり、いや。この時はもはや怒りが込み上げてきた。何千回同じ問いを繰り返すんだ？　宗は自分の胸の中から急激に想い

が溢れ出してくるのを、感じた。それはとても刺々しい想いだ。そして宗には、その感情を抑えることができなかった。言葉が一気に溢れる。
「何なんだよ！　他人の事ばかりいつもいつも！　他人だろ！　それをまるで分かったみたいに言う！　ほっといてくれよ！　お前は……詩音は、僕の何なんだよ！」
宗はあらん限りの大声で叫んだ。これほど叫んだのは久しぶりだ、というより前に叫んだのがいつかを覚えていない。ふと、妙な空気を感じ辺りを見た宗は、赤面した。
車内の客が全員こちらを見ている。刺すような視線。電車はもうだいぶ学校の近くの駅まで来ており、客はかなり増えていた。宗は、それに気づかなかった自分の迂闊さを、殴りたくもなった。
宗が、『詩音』と呼んだ少女は、怯えるような目で宗を見上げている。宗はうつむきながら、飛ぶようにして別の車両を目指した。なんでこんなことに。全部、詩音のせいだ。
だが何よりも、自分に腹が立った。

宗は電車から降り、いつものようにそこから歩いて学校に向かった。宗の通学手順は、まず自宅のアパートから自転車で駅まで行き、そこに駐輪。続いてその駅から、学校の近くの駅まで電車に乗り、後は歩いて少しの学校に行く、というものだ。おそらく同級生の中でもかなり通学に時間がかかるほうだと宗は思っている。最も、彼は同級生の通学手順を知らなかったが。
数分ほど歩くと、学校の門と校舎が見えた。どこにでもありそうな高校だ。だが宗にとってそこは、決して居心地のいい場所ではなかった。
どうせいつかは別れることになる仲なのに、意味のない挨拶を交わす。群れになって笑いあい……。
何が楽しいんだろう？　少なくとも僕はそんなことはしない。したくもない。

宗は校門をくぐり、ふと空を見上げた。
宗は視力だけは異常に良い。２．０以上はあると医者に言われたこともある。だから時々、見たくないものまで見えてしまうこともあった。
そして今がそうだった。
校舎の屋上に、妙なものが見えた。たった一人、人影だ。
屋上に人影がいる、というだけでは別に驚く要素には値しない。しかし、確か屋上は現在使用禁止になっていたはずだ。しかも影は心なしかこちらを見下ろしているようにも見えた。
宗はそれに一瞬興味がわいたが、すぐに頭から閉め出した。ばかばかしい。オカルト部か何かが謎の儀式でもやってるんだろう。
宗はため息をつき、校舎の中に歩いていった。

「見つけたよ。イントロダクト・オービス――」
屋上の人影――宗と同年代ほどの少年は、宗を見て確かにそう呟いた。
夜の闇のような黒い髪、そしてそれと対照的な青色の鋭く美しい目をした少年だ。少年が着ているのは宗の高校の制服だった。だが、明らかに普通の生徒とは、いや。むしろ普通の人間とは雰囲気が違う。
少年は何かを早口で呟いた、その瞬間。
少年の姿はそこから消えた。

第一話　『クラッカー』Ａパート後

学校が終わると、宗は誰にも目もくれず裏門を出て帰った。
学校から駅までにはちょっとした商店街（といってもアーケードのようなたいそうなものではなく、本当に昔ながらの商店街、といった風情だが）と、その裏通りを通るルートの二種類がある。宗は高校に入学してからずっと、登下校共に裏通りを歩いていた。無駄に人と会いたくないからだ。
裏通りの長さは百メートルほど。幅は、車が一台やっと通れるほどしかなく、暗くゴミ臭いからか人もめったに通らない。かつて宗の高校の生徒がかつあげを受けたこともあるらしく、入学して間もないころ学校から注意が呼びかけられていたが、宗は全く聞いていなかった。宗は今まで一度もそれに出くわしたことは無い。仮に被害にあったとしても、ずっと自分はこの道を通るだろう。
宗はふと空を見上げた。裏通りの壁や建物によって分断されたように見える青い空。それに宗は不思議と寂寥を覚えた。
暇になると宗はいつもあることを考える。
何故自分は生まれてきたのだろう、と。
それを見つけるために生きるんだ僕達は……なんて理想めいたことを書いているジュブナイル小説を見ると、虫酸が走る。
結局、自分は生きている。だから生きるしかない。違うのか？
「……君はいつも、そうやって一人で帰るのかい？」
前から聞こえた声。見ると、少年が立っていた。
透き通るような鋭い碧眼。それと対照的な漆黒の髪。少年は宗と同じ高校の制服を着、微笑を浮かべて立っていた。見覚えは無い。
いや、無いはずだ。
「一人は嫌だろ？」少年は続けた。
自分と同じ一年にはこんな外国人はいない。おそらく。
まだ入学して二月程しか経ってないから、というわけではないが、

宗はクラスメイトの名前を一人も覚えていなかった。だがさすがに、平凡な都立高校へこんな外国人が入学してくれば同学年内で多少の噂は立つだろう。自分の知る限り、そんな外人は一年にはいないはずだった。

例のカツアゲか？　しかしこんな朗らかな不良がいるだろうか……。なら二、三年だろうか？　可能性はゼロではない。宗は一応敬語を使うことにした。まあ、形だけだ。

「……誰ですか？」宗は、明らかに疎ましさを含めた声で言ってやった。

「別に名乗る必要もないけど……、言おうか。僕は、ニル＝アドミラリ。……君と同じクラッカーさ。トウマソウ、君」

ニル＝アドミラリ？名前も充分謎だったが、宗には後半の言葉の方が気になった。

クラッカー。確かインターネットでサイバーテロとかする人たちのことか？　宗はパソコンを持っていなかったが、それくらいは学校の授業などで聞いたことがあった。

それが僕と同じ、だって？

呆気にとられている宗を尻目に、その少年――もといニルは続けた。

「手っ取り早く言うよ。僕と一緒に来てもらいたい。無駄に連中と戦いたくないから、ね」

戦う？　宗は頭の中で、目の前で語っている男について、状況分析を始めた。つまり、自分が何か重要な存在で早く保護しないとその『連中』とやらと交戦するハメになる、ということか？　――我ながらすごい発想飛躍能力だとは思うが、これだけは言える。

――有り得ない。

自分はごく普通の高校生。当麻宗だ。そんなのはアニメか小説の中のおとぎ話だけにしてくれ。

「さ、どうする？　できれば穏便に事を運びたいんだけど」ニルとやらは、相も変わらずニコニコと微笑を浮かべている。

宗は直感的に感じた。
たぶんこの人は何かよくある心の病気で……、とにかく近づいて良いことは無いだろう。バーチャルとリアルを混同するほどまずいことは無い。
テンプレートな言い訳だが仕方ない。宗は、ニルと顔を合わせないように歩き出し、言った。
結果から言えば、それは間違いだったのかもしれない。
「……すいません、急いでるん」
「嘘だ」
ニルの姿が、消えた。
次の瞬間、宗は脇腹に凄まじい衝撃を覚えた。何が起こったか、見ることすらできない。
反転する視界。
何かに体が激突した。肺から酸素が絞り出される。
ゆっくり目を開けると、そこは路地のようだった。裏通りには一本だけ、袋小路になっている路地がある。宗は今まさにその突き当たりまで吹き飛ばされたことになる。距離で言えば十メートルほどだ——待て、十メートルも蹴り飛ばした?
「かなり強い蹴りのつもりだったんだけど……、ファイアウォールか。流石はクラッカーってとこだ。後、ゴミ捨て場に助けられたね。全く運が良い」
ニルの声。路地裏の入り口に立っている。
宗は脇腹に残る鈍痛を堪えながら、自分がゴミ捨て場で仰向けになっていることに気づいた。おそらくこのゴミ捨て場が、吹き飛ばされた宗のクッションになってくれたのだろう。
宗は震える足を無理やり立たせた。自分の全神経が言っている。逃げろ、と。
「バカだね、君。素直について来ればいいのに……。なんかイライラしてきたな。時間が無いし、死ね。どうせ要るのは眼球だけさ」
何が何だか分からない。だがこれだけは理解した。

自分は今確実に、殺されようとしている――。

ニルが右手を上に挙げ、呟いた。

「ｏｂｊｅｃｔ－ｃｏｄｅ：アイアンパイル」

この世のものとは思えない白い閃光に包まれるニルの右手。それを降りかぶり――、

「ｉｎｔｅｒｐｒｅｔｅｒ」

ニルが何かを宗めがけて投げた。

――宗がそれをかわせたのはほとんど僥倖と言ってよかった。とっさにしゃがんだ宗の頭上の空間を、鈍い金属光が切り裂いた。

針。いや、そんな生易しいものではない。工事現場などにある、長い鉄パイプ。その両端を尖らせたような、二メートルはあるだろう巨大な鉄の針。それはまさに、『鉄の杭（アイアンパイル）』と呼ぶに相応しかった。

その鉄の杭が、自分が元いた位置のコンクリートの壁に突き刺さっている。深々と。

考えられない。

宗は腰が抜け、その場にへたり込んだ。手足が震える。冗談はやめてくれ、と言おうとしたが、歯と歯が噛み合わず、喋れなかった。

そもそも、これは冗談か？　いや、あいつは人間なのか？　微笑を浮かべながら鉄パイプを投げつけてくる、あの男は。

「あれ？」ニルは言った。「一発で仕留めてあげようと思ったんだけど。どう足掻いても君は逃げられないよ？　だったらもう諦めて死ぬのが得策だと思うけど」

ニルはまた先程の呪文のような言葉を発した。

閃光。再び迫り来る鉄の杭。かわせない。宗は思った。

宗は初めて悲鳴をあげ、本能的に目を閉じた。

死ぬ。

こんな現実的に考えて、有り得ない状況で、自分は。

轟音。一瞬にして腹を貫く鉄の杭の感覚。喉から湯が沸騰するように溢れる血液。宗はもう声をあげることもできずに……。

――違った。
宗が目を開けると、そこには何者かが立っていた。
その人影が出しているらしい、六角形が多数に集まったような障壁――バリアと呼ぶべきか。それに阻まれ、鉄の杭は空中で制止していた。もはや宗は目の前の現実をただ受け止めるしかなかった。
というより、これは現実か？　夢じゃないのか？
次の瞬間。静止している杭は吹き飛び、弧を描いてから近くの地面に突き刺さった。防御できたのだ。
人影は、宗の方を振り向いた。
歳は十五、六ほどに見える。見るものを魅了するような美しいブロンドの髪を左右でツインテールに束ね、水晶のような青い瞳はまるできらきらと美しい輝きを放っているようだった。アイドルか何かのオーディションを受ければ、一発で審査員の目を引くこと間違いなし、文句なしの美少女だったが、無駄な贅肉の一切無い引き締まった身体を見れば、彼女がただの少女ではないことは容易に想像できた。……だが！
「バカ？　学校、ちゃんと正門から出てくれない？　護衛のしようが無いから」
……彼女の第一声は『バカ』だった。

第一話　『クラッカー』Bパート前

ニルも、第三者の出現に驚いてはいたようだ。が、今はもう先ほどのように、顔に怪しげな笑みが戻っていた。

「へえ。もしかして、『組織』のヒト？」

少女はニルを眺めた。「ご名答。あんたは、見たところ余計な情報を仕入れた非組織所属クラッカー……ってとこかしら？」

「はは。言ってくれるね」ニルは少女を見据える。「確かに僕はパーソナルクラッカーさ。何かに縛られるのが嫌いでね。で、『組織』の……Ｎｏ．７だったかな？　『ミレッタ＝グリーナウェー』さんだっけ？」

ミレッタと呼ばれた少女は、若干の驚きを見せていた。自分の名前が相手に知られている事、に対してだろう。

ニルは続ける。「僕は、情報を最大の武器と思ってる。とりわけ僕達クラッカーにとってはね。……ま、そんなことはいいよ。僕はイントロダクト・オービスを手に入れたい。君はその妨害が任務。これほど分かりやすいことは無いね」

ミレッタはため息をついた。「『取り込む眼』の存在まで知ってるとはね。褒めてあげたいくらい」続いて、先程からずっと腰を抜かして呆然としている宗を見下ろし、

「内臓に損傷があるみたいね。とりあえずあんたは伏せてて。死にたくなければね」と言った。

宗に対する感情など微塵も感じられない、完全な命令口調だ。

「……死ぬ？」

宗には分からなかった。

ここは現実なのか？

いきなり蹴り飛ばされ、鉄パイプが飛んできて殺されるかと思ったらあげく金髪美少女にバカ呼ばわり。そしてさっきから会話に出てくる、クラッカーとか、イントロダクトうんぬんといった意味不

明の言葉。何なんだ？　エスパーのことか？
　もう、訳が分からない。自分は夢でも見てるのか？　こんなこと現実的に考えて有り得ない。いや、あってほしくない。でも、目の前でこんな超常現象が立て続けに起きれば信じるしかないんだろうな。
　――やれやれ、儘よ。宗は、考えるのをやめた。というよりもう頭がついていけない。とにかく、この少女が言ったのは『伏せろ』という命令だけ。伏せるのなら犬にでもできる。それにどうせ僕はこの場では蚊帳の外だ。できることは何もない。とりあえず素直に伏せよう。後はやりたいんなら、勝手にやってくれ。僕と、このミレッタとかいう女の子に何の関係がある。僕を守りたいんなら守ればいい。適当に。
　宗はミレッタと目を合わせるのが嫌になり、俯いた。宗は、人と目を合わせて喋ることが苦手だった。どうしても目を逸らしてしまうのだ。何故かは分からない。性癖というやつだろう。
「案外、素直ね」ミレッタはそんな宗を見、言った。「あんたはそこで見てなさい」
　そして再び、敵を見据える。手を大きく翳し、叫んだ。
「ｏｂｊｅｃｔ－ｃｏｄｅ：ジャスティスブレイカ、ｃｏｍｐｉｌｅ！」
　次の瞬間、巨大な大剣がミレッタに握られていた。
　大剣――そう呼ぶには程遠いのかもしれない。確かに全長二メートルはありそうな巨大な剣だったが、明らかに違うのはその刃の部分だった。刃が全て回転式のチェーンソーになっているのだ。
　少女には似つかわしくないような、金属の掠めあう駆動音がけたたましく響いていた。
「いいプログラムだ。精密に計算された構成だよ。だけど……」言葉と同時にニルは振りかぶり、例の鉄杭を数本、放った。放たれた杭は真っ直ぐ宗たちのところに向かって来る。だがミレッタは狼狽えもせず、大剣を目にも見えぬ高速で振り回し、それら全てを凪ぎ

払った。
もはやどちらも人間の限界、地球の物理法則を遥かに凌駕してぃる。それは宗の目から見ても明らかだった。彼らが人間ではないか、ここが現実世界でないか、のどちらかだ。
自らの放った杭を弾かれたにも関わらず、ニルは全く動じていない。むしろ笑っていた。「君は絶対に勝てない。僕にね」ニルはそう言った。
続いて高く跳躍するニル。軽く十メートルは跳んでいるだろう。そのまま空中で杭を放ちながら、壁を蹴り移動。宗めがけさらに放つ、放つ。
針の雨。
そう呼ぶにふさわしい光景だ。ミレッタは声をあげ、剣でそれらを一つ残らず払い続ける。宗はうずくまっているばかりだった。
「分かるかい？　君はそいつを守っている以上、そこから動けない」ニルは空中で、体操選手――それもオリンピック級だ――のように回転し、ほとんど音も無く着地した。再びミレッタとの距離は最初に戻った。
「君の武器は見たところ接近戦専用。なら動いてしまえばそこのトウマソウが狙われる。つまり……」ニルは何かいたずらを考え付いた子供のような笑みを浮かべ言った。
ニルは、杭をたった一本だけ飛ばした。それを大剣で弾くミレッタ。
――だがその直後、ミレッタの姿勢が崩れた。倒れ込みそうになるのを咄嗟に両手で堪える。片足立ちがやっと、といった状態だった。
「そんな」初めてミレッタの顔に焦りが浮かんだ。「まさか、もう……！」
「そうだ。僕の攻撃を弾くために剣を高速で振り回す……。だがそれは、君の身体能力を大きく越えたプログラムを、常時コンパイルし続けるということだ。そして今、君の体力が限界に達した。『フ

リーズ』だよ」
「っ……」
ミレッタが息を切らし、喘いでいる。
宗はそれをただ見ていた。だがどうすればいいのか分からい。分かるはずもない。これってかなりまずい状況なのか？
「女性をいたぶるのは趣味じゃなかったけど、やっとしなくて済むなぁ」ニルは両手を広げ、肩をすくめた。「君はここで死ぬから」
ニルは再度降りかぶる。そして――、
「ｏｂｊｅｃｔ－ｃｏｄｅ：スパイラルパイル、ｉｎｔｅｒｐｒｅｔｅｒ」
集束する光とともに、先程と同じような鉄の杭がニルの手に現われ、放たれた。
だがそれは今までのものとは明らかに違う。まるでドリルのように、杭自体に螺旋状の溝が見える。その速度も今までの杭の二割増しほどはあった。銃器で言えばライフルか？　貫通力と命中率の向上を図っているのだろう。
ミレッタは舌打ちをした。自分の体はほぼ動かない。つまり、宗を連れて逃げることは不可能だ。ならば残された選択は二つ。
――すなわち、自分を犠牲にするか、宗を見捨てるか。
「大切なのは、世界の命運か、私の命か。……そんなの決まってる……」
迷う暇は無い。ミレッタは決意した。

次のミレッタの行動、――宗は自分の目を疑った。
宗の目の前にいる少女は、自ら飛んでくる杭に向けて走り出したのだ。
宗は目を閉じた。駄目だ。あの娘は死ぬ。
鈍い音。
同時に、宗は何か温かいものが飛んできたのに気づいた。
血だ。大量の。

「二人まとめて殺そうとしたんだけど……、まさか自分の体で止めるとは。いや、凄いな。さすが『組織』のクラッカー」

なんの抑揚もない声でニルは言った。

第一話　『クラッカー』Bパート後

宗は見た。
ミレッタは目の前で仁王立ちになっている。そしてその腹部に刺さった杭。辺りに飛び散った大量の血という血。
まるで糸の切れた人形のように倒れるミレッタ。血流がコンクリートの地面を円形に濡らす。
宗はその血だらけの物体を凝視した。
分からない。
宗には、ミレッタの行動の意味が分からなかった。なんでここまでして、自分を助けようとする？　そんなに自分という存在は大切なのか？　いや、命を捨ててまで守らなければいけないものなのか？　――他人なのに。
よく見ると、ミレッタは腹だけでなく両手も使って杭を止めたようだった。手のひらの皮膚はずたずたに引き裂かれ、そこからも血が溢れている。
自分への貫通を防ぐために。全て、自分を守るために。
宗は思わず尋ねていた。
「何で、僕なんかを？」
ミレッタは虚ろな目を宗に向けた。
「あんたを守るのが、あたしの任務だからよ……」
任務。そのために命を捨てる？
宗は始めてその少女に恐怖を覚えた。人間にとって一番大切なものは自分の命だ。なぜなら、自分の命が無ければそれ以外の行動が何も出来ないから。単純だ。
なのに何故、ここまで出来る。
宗にはそうまでしてミレッタを突き動かすものが何なのか、理解できなかった。今では目の前の少女が、人間ではないグロテスクな怪物にも見えた。

ミレッタは続ける。「ショック死しなかったのが奇跡……。でも、早く人体素粒子のリプログラムを実行しな、いと……」既にミレッタの顔は青く、顔も宗の方は向いているが目の焦点が合っていない。

少女は、血でてらてらと光る黒い携帯電話――どちらかといえばPHSの形に近い――をポケットから出した。

「逃げなさい……。これで、『組織』に……連絡、を……」

だが、宗はそれを受け取れなかった。

ミレッタの言葉は聞こえても、それを脳で判断することが出来ない。

完全に感覚が麻痺していた。

この少女は、僕を守ってここまで傷ついている。

僕はどうすればいい？　ラブストーリーみたく、彼女の亡骸を抱えて泣き叫んでみるか？

出来るわけ、無い。

やっぱり僕には生きる価値も何も無い。間接的とはいえここまで人を傷つけてしまったんだ。

ミレッタとか言ったな、この娘。

宗は胸を締め付けられるような気がした。この娘は僕を必死で守り続けてくれたのに、僕は何も出来ない。そして僕は死ぬ。死んだら、この娘が守ってくれた意味も無い。

結局、何もかもパーだ。

向こうで、ニルが何かを言っているのを宗は見た。でももう何も聞こえない。先程からずっと嫌な耳鳴りがしている。体が言うことを利かない。

そしてニルはたった今、あの針を放った。その軌道は確実に宗を捉えている。

「やれやれ」

宗は朦朧とする意識の中、自分の口癖を言ってみた。意味なんて無い。

どすん、と体に強い衝撃が走った。見ると、左胸――心臓の辺り

に杭が貫通している。

　不思議と痛みは無かった。

　視界が消えていく。宗は何気なく、ガラスが割れるイメージを思い浮かべた。

　何故だろう。あれほど生きることに意味など感じていなかったのに。

　――死にたくない。

　始めてそう思った。

――ようこそ、地獄へ。

「……え？　地獄？」

――そうだ。……周りを見てみろ。何が見える？

「……真っ黒」

――見えないから真っ黒なんだよ。お前は生の原動力たる『生命』を奪われた。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、全て、ナッシングネス。つまり無。こうして感覚の声が聞こえている気がするだけだ。……だが思考だけは、永遠。クローズドサーキットみたいなものだ。それが『夢』と『思考』の異なる点だ。分かるか？

「……？　いつまで、これなの？」

――永遠に。死んだんだから、当たり前だろ？　それくらいの代償はある。

「それじゃ、退屈だ」

――死んだんだから仕方ないだろ？　じゃあ、俺は行くぜ。

「待ってよ、待ってくれよ、待ってください……！　ちょっと待ってよ！　もう少し詳しく聞かせて……。そうだ、君はなんて名前なの？　なんで僕が地獄なの？　何もしてないのに……。いや、何もしてないからかな。それが神様の怒りに触れたの？　……ごめん、ごめんなさい。なんでもするよ……。許して！　ねえってば、なんとか言ってよ！　大声出していいのかい？　僕は本気だよ」

沈黙。――よし、やってやろうじゃないか。

「うわあああああー！」
漆黒は、何も語らなかった。
「うわあああああーあああああー！！」
永遠にずっと一人。――まるで壊れたテープのように言葉が宗の意識下で繰り返された。
怖い。怖い怖い怖い怖いコワいコワイ。
「……うワぁぁぁあアアアアあぁぁァァァぁ！！！！」
明かりが降り注いだ。

薄暗い。
空に、開いた穴から射し込んでくるわずかな光。全身にまとわりつく汗。どうやらひどくうなされていたらしい。体が氷のように寒かった。
宗は震えながら呟いた。
「死んで、ない」

第二話　『イントロダクト・オービス』Aパート前

宗はゆっくりと、ところどころ痛む体を起こした。辺りを見渡す。時刻は夜。真上にある月が、松葉を薄く照らしている。ここは、森だ。雑木林だ。
その腐葉土の上に自分は横たわっていた。
体に外傷は、無い。――全く、無い。ただ、全身の筋肉が痛かった。もっとも、制服の左胸には大きく穴だけが開いていたが。
頭の中がごちゃごちゃだ。
取り敢えず、立ち上がってみる。かなり長い間寝ていたのか、立つことすら困難だ。足下がおぼつかない。
そこで音に気づいた。水の音。川の流れの音。せせらぎの音だ。
どうせ行くあてもない。
宗は音のする方に歩いていった。

少し歩くと、ちょっとした池にたどり着いた。ごつごつとした岩が積み重なり、それが緩やかな傾斜を造っている。いかにも美しい、山奥の源泉といった様相だ。
だが、宗は眼下の光景に釘付けになっていた。
そこで少女が水浴びをしていたのだ。
――無論、全裸で。
「某少佐だって戦場で手柄を立てて出世したんだ……」
どこかで聞いたような台詞を呟きながら、ちゃっかり池の数メートル上、崖に生えた茂みからそれを覗いている宗を誰が止められよう。山奥の池の畔で水浴びをしている少女を目撃するなど、普通に暮らしていればまず、無い。
引き締まった肩、すらりと伸びた太股、見事な形の双丘。完璧だ。宗は思った。もはや目を離すことさえ躊躇われる。
流れるような金髪、そしてあと少しで見えそうな恥丘……。宗は

何とかアングルを変えようと試みた。場所をここから一メートル程右にずれれば、間違いなく見える。あと少しなのだ。本当に。
だが人間、欲望に身を任せたときほど失敗することはない。
——このときもやはり同様だった。
「……え？」
宗が足を動かした先には、まだ乾ききっていない、湿ったぬかるみがあった。足場が無くなり、強制的に姿勢が崩れる。宗は真っ逆さまに、少女が水と戯れている池へと堕ちていった。悲鳴を上げる間もない。
着水。視界が水に覆われた。池はかなり深く、宗の足が底に着かないほどだ。——しかも、宗は泳げなかった。昔から水泳の授業は嫌いだったし、海にも生まれてから一度も行ったことが無い。無我夢中で手足をばたつかせ、近くの岩にしがみつく。宗は呼吸を整え、胸を撫で下ろした。しかし——、
「何やってんの……」
背後からの殺気。しかしその声には聞き覚えがあった。宗は恐る恐る、振り向く。
宗は初めて気づいた。そこにいたのは、金髪碧眼にツインテールの美少女。だがそのこめかみにはぴしっ、と血管が浮き出、頭上に二メートル超の大剣を掲げた……、
「贖罪しなさい……！　今、ここで！」
……ミレッタ＝グリーナウェーだった。

「ったく……。なんで男ってのはこう……、アレなのかしら」
半ば呆れた表情で下着姿のミレッタは、同じく下着姿の宗を見下ろしている。先程の珍事件の後ミレッタは池の側にある大きな岩の上で、薪をくべ火を熾していた。服を乾かす為だ。
宗は淡白な無表情でずっと、目の前で静かに揺らぐ炎を見ていた。ミレッタが自分に愚痴をもらしていることに気づいたのは、かなり後になってからだった。

「その上、『組織』からは全然連絡無いし……」ミレッタは宗の向かい側に腰掛けながら呟いた。「どっかのバカは小一時間一言も喋らないし、動こうともしない！」ついに、宗を睨みながら言い放つ。「ごめん」宗はとりあえず小声で呟いた。だが視線は移さない。──火は何も言わないからだ。
「あんたさ……」ミレッタは宗を見つめる。「正直、『ごめん』って言えば何でもすむと思ってんでしょ？」
「思ってないよ……」炎が揺らめいた。
「今までも『ごめんなさい』の一遍通しで来たんでしょ？」
「……仮にそうだとして、何が悪いんだよ」
ミレッタは深くため息をついた。「そうね。悪くは無いかもしれない。あんた、学校じゃ、どうせ友達ゼロなんでしょうね。人との交流を減らすのは、楽な生き方よ。……でもいつかは、絶対に困る。他人を拒絶ばかりしていて、他人に受け入れてもらえるはずがないわ」
「人に受け入れてもらえなくても構わないよ。──僕は一人で生きる」炎が、大きく揺らめいた。風は強くないのだが。
「無理よ」ミレッタはきっぱりと言った。「人は、人と関わることでしか人として生きることができない」
「できるよ」宗は、ミレッタを見据えて言った。
「できない」ミレッタは、宗を見据えて言った。
ぱちぱち、と薪が爆ぜる断続的な音だけが静寂を妨げる。
先に沈黙を破ったのはミレッタだった。
「もういいわ。あんたとの付き合いも、もうすぐ終わるし」
「……どういうこと？」宗は、自分の口からそのような言葉が出たのに驚いた。思えば、自分がこれほど他人と喋っているのは久しぶりだ。
「あたしの任務は、あんたを『組織』に連れてくことだからよ。今はまだ逆探知される危険があるから、ポートが開いてないけど、向こうに行けばそれで終わり。もうあんたと会うことも無いでしょう

ね」
「……僕はどうなる？」宗は再び炎に目をやり、言った。
「さあ？　生体実験されて人間兵器にでもなるんじゃない？」ミレッタは両手を広げ、肩をすくめる。「……ってのは冗談だけど。あたしにも分かんない」
　だが宗にとっては別に、生体実験でも何でもされようがどうでも良かった。この世に超常現象が存在するんだ、という事実は目の前であんな戦いを見せられてしまった以上、もはや嫌でも信じざるを得ない。なら勝手に連れて行けばいい。もう今さら逃げられないし、特にこの世に未練があるわけでもない。やれやれ、だ。宗は心の中で呟いた。
「もう少ししたら『組織』から連絡が来るはず。そしたらサヨナラね。二度と会うことも無い」ミレッタは近くに積んである薪を一本、炎の中に放り込んだ。
　再び、沈黙。
　今度は、宗がそれを破った。どうしても、自分がこれだけ他人と喋れる理由が分からない。だが言葉が自然に出るのだ。不思議だった。
「……『クラッカー』ってなに？」
　ミレッタは宗を凝視した。
「あんたから会話が始まるなんて、大質量隕石でも降ってきて地球の総人口の半数が死滅、さらに南極の永久凍土は融解し水面が十メートル以上上昇。さらに地軸が傾いて各地で異常気象が発生するし、暴動や紛争も起きる。東京でも爆弾テロが起きるんじゃない？　あと、日本は永久に夏になるわ。それくらい珍しいわね」
　どれだけすごい災害なんだよ。宗は心の中で呟いた。
「ま、いっか。どうせヒマだし、簡単に説明するわ」ミレッタは足を組み替える。「クラッカーてのは、つまり天才よ。人間を遥かに越えた神経速度を持つもの、と言われてる」
「神経速度」宗は鸚鵡返しに言った。

「かなり昔、物質の最小単位は分子と思われていた。でもしばらくするとそれを構成する、もっと小さい原子というものを人間は見つけたの。さらに段階的に原子核、中性子や陽子というように時代につれて物質の構成単位、つまり素粒子と定義されるものは変わっていった。現代ではクォークやレプトンやゲージ粒子、それらの反粒子がそう。ちなみにこれを物理学用語で『自然の階層性』というんだけど――、そんなことはいいわ。で、クラッカー達……、って言ってもブラックハッカーという意味じゃなくて、あたし達のような『異常な神経速度をもつ者』のことよ？　ま、とにかくあたし達クラッカーは素粒子を構成する最小のデータ単位をプログラムで表記し、物質を表すことに成功したのよ。特殊なプログラム言語――、云わばこの世界を構成するソースコードでね。……分かると思うけど、これは凄いことよ。人間が素粒子から自由に物質を生み出すことが出来るんだから。ただし条件があった。驚異的な神経速度を持つ人間、つまりあたし達クラッカーでないとそれは無理だったの。そしてあたし達にとっても物質の創造は極めて難しい。何せ頭の中でパソコンのプログラムを全て記述するようなものだからね。かなりの訓練が必要よ。……で、更にそれを実行……、つまり空想上の曖昧な存在から、大義的に目に見える物質としての存在に変化させるコンパイルやインタプリタ。無から有を生み出す……、まさに禁断の力ね。……聞いてんの？」

宗はうんざりしていた。聞かなければ良かった。全く意味が分からない。何が自然の階層性だ、素粒子だ。ほとんどSFじゃないか。

「まあ、『組織』に行けば誰かから嫌でも詳しく教えてもらえるわよ」ミレッタは、宗が分からなくて悩んでいるのだと解釈したのか、励ますように言った。宗は実際、聞いてすらいなかったのだが。

「……で、僕がその『クラッカー』だっていうの？」

「そうよ。現にあんたはもう、一人殺したでしょ。あんたの手で」

思いがけない言葉に、宗は思わずミレッタを見た。僕が一人殺した？

嘘だ。
「殺した、って……」
「あんた、覚えてないの？　三日前の夕方。あんたとあたしが会った日よ」
三日も経っていたのか。宗は納得した。道理で起きたときに全身の筋肉が衰えたような気がしたわけだ。
いや、納得している場合ではない。
「だ、誰を――、」
その時、ミレッタの携帯電話が鳴った。

第二話　『イントロダクト・オービス』Ａパート後

「これは……」ミレッタは、側に置いてある黒い携帯のディスプレイを確認するやいなや、叫んだ。「『組織』からよ！　やった！」
宗は、喜び勇んで携帯を耳に当てるミレッタをぼんやりと見ながら、言葉が自分の中で反響するのを感じていた。
自分が人を殺した。では誰を？　三日前の夕方。あの時裏通りにいたのは自分と、この娘と、そしてあと一人――、
違う！　宗は心の中で叫んだ。自分に彼を殺せるはずがない。こっちは二人とも、あれだけ追い詰められていた。自分は心臓を杭でつらぬかれ、ミレッタは腹部をそれが貫通し――、
待て。宗は、悪寒を覚えた。
『何故自分は生きている？』
心臓を刺され、それからどうなった？
いけない。宗は直感的に耳を塞いだ。耳の中にあの少年――ニルの断末魔が木霊してくる。吹き飛ぶ彼の腕。炭酸飲料のように激しく飛び散る彼の血。恐怖にゆがむ彼の顔。全てがリアルに脳裏に浮かんだ。まるで自分で、彼を殺した記憶を反芻しているかのように。
――いや嘘だ！　有り得ない！　自分には何の力もない。ミレッタや彼のようなクラッカーとかいう超能力もない。人を、殺せるわけがない。そうだ。
もう忘れよう。宗は必死で、揺らぐ炎だけを見つめた。思考を白紙に戻すんだ。考えるだけで気が狂いそうになる……！
そこでミレッタが話しかけてきてくれたのは、宗にとって幸運だった。少しでも自分の思考を外に向けてくれるものが欲しかったからだ。
「決まったわよ……」たった今携帯で、電話の向こうの相手――おそらく組織のメンバーか何かだろう、その人と話し終わったミレッタが呟いた。

　なぜか電話を受け取ったときはあれほど喜んでいた顔が、失墜に呑まれ絶望に打ちひしがれた表情と変わっている。
「どうしたの」宗は意識を会話に向けようと試みた。
「どうもこうも無いわ……。任務変更よ。アークの奴、司令になったからって調子に乗りやがって……！」ミレッタはうなだれて言う。
「今からすぐ、あんたの家に行くわよ」
「は？」宗はまさしく鳩が豆鉄砲をくらった、と形容すべき表情を浮かべた。
「ＶＣ移動を使うわ。あんたも服着なさい。もう乾いてるでしょ」
　ミレッタは炎を消し、自分の服を着ながら言う。
　何を言っても無駄だろうな。そう思った宗は、おとなしく服を着た。ＶＣうんぬんが何か、は知らないがどうせまた巻き込まれるんだ。やれやれ。
「準備良いわね？　じゃ、行くわよ」そう言うと、ミレッタはいきなり宗の手を握る。
　女子から自発的に、『手を握る』などという行為をされたことが宗には無かった。手のひらに広がる暖かい感触。もう少しこの感覚を楽しみたい。宗は自然に思った。
　――だが、現実は厳しい。ミレッタが凄い早口で、何かを呟いているのに宗は気付かなかった。ミレッタは全て言い終えると、一言だけ呟く。
「Ｃ．Ｌ．Ｇ．Ｗ．Ｍ．、Ｒｅａｄｙ」
　その言葉に宗が気づいた時には、すでに遅かった。
　歪む視界。
　突如、体が引き延ばされるような感覚を覚えた。痛い。平衡感覚を感じられない。まるで、巨大な箱の中に入れられ外から揺さぶられているかのようだ。しかも風が乱暴に吹き付けてくる。宗は目を閉じずにはいられなかった。一体何がどうなって――、
　と、次の瞬間体が地面に叩きつけられた。一瞬呼吸が出来なくなるくらいの衝撃だ。と同時に、全てが歪むような変な感覚も消えた。

「久しぶりに成功。上出来ね」ミレッタが満足げに言うのが聞こえる。

宗はゆっくりと目を開けた。

ああ、なるほど。宗はそれだけ思った。正直ここまで度肝を抜かれ続けているため、もう度肝を抜く余地がないのだ。人間の環境適応能力は相当なものだと何かで聞いたことがある。

「やれやれ」

VC移動。それは瞬間移動だったらしい。

二人は平然と山奥の雑木林から、宗の住むアパートの前へと瞬間移動したわけだ。実に非現実的。

得意げに胸を張るミレッタを横目に、宗はまた呟いた。

「やれやれ……」

第二話　『イントロダクト・オービス』Ｂパート前

宗の家は、ごく一般的な住宅地の一端にある、古い二階建てアパートの一階、１０３号室だった。キッチン付き六畳和間にバス、トイレ完備。この設備で家賃は￥１８，６００。良心的な値段だ、と宗は一応思っている。

だが、ミレッタは気分をかなり害されたらしい。部屋に入るなりミレッタは顔をしかめた。

「何よこのボロ家……！　シャワーあんの？」まだ玄関だというのに、これである。宗はほとほとうんざりしつつ答えた。

「ある。クーラーは無いけど」頼むから、用を済ませたらさっさと帰ってくれ。宗は心からそう願った。

「はぁ？！」ミレッタはヒステリックな声を上げる。「これから暑くなるっていうのに……。トイレは？」

――これから暑くなる？

宗はミレッタの言葉に違和感を覚えた。まるでこの家に住むかのような言い方だ。いや、まさか。神はそこまで自分には酷くないだろう。

「トイレもある。和式だけど……」

ミレッタは首をかしげた。「和式？」

何よそれ、と言うので宗はトイレのドアを開けて見せてやった。日本ならだいたいどこでも見かける普通の和式トイレだ。だがミレッタは不思議そうな顔をしている。

「へえ、変わったオブジェね。で、トイレは？」

宗はそれで今更ながら気づいたが、ミレッタは外国人である。日本文化――和式トイレは日本の文化なのだろう、きっと――を知らないのも無理からぬことだ。なるほど、先程から人の家に土足で入っているのはこの為だったのか、と宗は静かに納得した。ちなみにここでいう『人の家に土足で入る』というフレーズには、慣用的意

味合いもありそのままの意味も含まれている。……つまり平然と人の心を踏みにじるわ、なおかつ靴も脱がずに家に入るわという二つの意味だ！　――まさに外道。宗はもはや、ミレッタが未だ靴を履いていることに対して何を言う気も起こらなかった。第一に言うだけ無駄だ。

宗が和式トイレと日本文化の関連性について簡単に説明すると、終わる頃には日本文化――というより和式トイレに対する、深い失望がミレッタの顔に出ていた。

「……日本に来たのがマチガイだったわ……」

続いてミレッタは、六畳和間――、つまり宗にとっての寝室、兼キッチン、兼ダイニングルームへと向かった。

宗は整理整頓が得意ではない。掃除に対して必要性を感じないのだ。ある程度汚くても生活はできるし、困ることはない。なら面倒なことはやるべきでないだろう。それが宗の考えだった。

「何よこれ！」コンビニ弁当の空箱や学校の教科書、プリント類が散乱し、シワだらけの布団が敷かれた部屋を見て、ミレッタは悲鳴を上げる。「汚らわしい！　まるでソドムとゴモラの再来よ！！」

人の部屋の様相を、旧約聖書の神によって滅亡させられた街をメタファーとして用いるのはいかがなものだろうか。宗は電気を点けながら思った。

ミレッタはさらに叫ぶ。「耐えれないわ！　掃除よ！　さっさと一人でやりなさい！」

「その必要性がないよ」宗は言った。当たり前だろう。「僕の部屋なんだ。……別に汚くてもいいじゃないか」

「違うわ。この部屋はたった今、あたしの管轄下になったの！」

……はい？　意味不明だ。「それってどういう――、」ことなんだ、と言い終える前に、ミレッタは言い出す。「『組織』の命令よ」深いため息をついてから、一言づつはっきりと叫んだ。

「『組織』のセキュリティ回復まで当分、この部屋に泊まり当麻宗――つまりあんたの護衛をしろ、っていうね！」

一瞬、時が止まった。少なくとも宗の中では。
と思うが早いか、家のドアがまさに家ごとぶち壊さんとするかのように叩かれた始めた。それに合わせて激しい罵声も聞こえてくる。宗にはそれに心当たりがあった。しかも最悪の心当たりだ。
「何かしら」ミレッタは、たいして動じることもなくドアの方を見た。「あ、日本のドラマで見たことある！　『シャッキントリ』の『オイタテ』ってやつでしょ？！　すごぉい！」
「お隣さんだよ……」何がすごぉい、だ。宗は人生で経験する驚きや絶望を一身に背負ったかのように肩を落とす。「お隣さんはかなり気が荒いんだ……。ずっと君が大声で話してるから、向こうに音がかなり響いてたんだ、きっと。どうしてくれるんだよ……」
宗は今まで二、三回ほどだが怒られたことがあった。アロハシャツを着、髪はリーゼント、さらにサングラスをかけた、まさにチンピラの中のチンピラといった風貌だったのでよく覚えている。一番ひどかったのは五月半ばだったか。入ってくるなり、拾いものではあるがお気に入りだった１４型ブラウン管テレビをバールで粉々に破壊されたことだ。あれ以来この家にテレビはない。以来、宗も怖くなりほとんど部屋で音らしい音をたてたことがなかった。
ミレッタはそれを聞くと、しばらく思案してからこう言った。
「利害は一致するわね。いいわよ、あたしが話つけてきてあげる」
「無理だよ」宗は床を見つめる。「向こうは本当にキレてるんだ。こんなに激しくドアを叩くのは初めてだよ。……殺されるかもしれない」
「殺される？」ミレッタは呆れたように言った。「――ならその前に殺せばいい話よ」
――本当に行ってしまった。あたしが帰ってくる前に部屋の中掃除しときなさい、と言い残し、ミレッタは怒りと喧噪のうずまくドアの向こうへと行ってしまったのだ。その後で、宗は気付いた。
実は本当にお隣さんが殺されてしまうんではないか、と。

宗はとりあえず言われたとおり掃除をしながら、外に聞き耳を立ててみた。いや、立てるまでもなかった。

いきなり、車のバックファイアのような爆音が轟く。車でも壊したのか？　いや、違う。瞬間的に宗は先程のミレッタの台詞を思い浮かべた。『殺される前に殺す』――そうだ、これは銃声、だ。同時にそれまで続いていた男性の低い怒鳴り声がぴたりと止んだ。まさか。

続いて、何か石を砕くような音に加え、悲鳴――もちろん、低い男の声でだ。それ以外に考えられない――が聞こえてくる。どうやら生きてはいるらしい。宗は胸を撫で下ろした。犯罪になってはたまらない。

それ以降は、しばらく静かになった。ときおりミレッタがドスの利いた声で怒鳴るのが聞こえてきたが。宗はその間に、一通り部屋の掃除を済ませた。汚い、とは言っても足の踏み場はあるし、ゴミも全てゴミ箱に入りきる。そこまで汚くはないだろう。と宗はある意味殺風景になった部屋を見て思った。

しばらくすると、ミレッタが帰ってきた。満足そうな笑みを浮かべている。

「中世の拷問器具を数種類見せて、その実用性と効果について話したら真っ青になって謝ってたわ。あんな好戦的なくせに、尋問に対する訓練も受けてないのね。ま、面白かったからいいけど」

恐ろしい少女だ。宗は思わず冷や汗を流した。「じゃあ最初の爆音は？」

ミレッタはまるで、今日の天気について話すかのように言う。「ガバメント――あ、拳銃ね。それで足下にぶっ放したのよ。あんまりうるさかったから。あれが決め手だったわね。それから一言も喋らなくなったし。……あ、あんたも掃除終わったのね！　もう十二時だし、寝る準備するわよ！」

……やれやれ。

「あんたは押し入れで寝なさい。あたしがこの部屋で寝るわ」
「そんな無茶な……」
二人は入浴も済ませ――無論、一人ずつだ。断じて背徳的事項はこの空間において存在し得ない。そんな事すれば自分が死んでしまう……！ｂｙ宗――夜着に着替え、寝場所の取り合いをしていた。
もはや宗の家であることは完全にミレッタの思考外にある。
「だいいち、布団は一つしかないし……」宗は言い訳のつもりで言ったのだが、それが意味することに気付き、思わず赤面した。
「へえ？　じゃあ、あんたと二人で寝ろって？」ミレッタは腐った蜜柑を見るような目で宗を見つめる。「冗談じゃないわ。あんたと寝るくらいなら犬の方がましよ」
「犬……」宗は少なからずショックを受けた。
「じゃ、決まりね。あんたは自分の布団を押し入れに移動させなさい」
「君は布団どうするの？」
「こうするのよ」すると、ミレッタはかなりの早口で何かを呟き始めた。まるでゲームかなにかに出てくる呪文の詠唱のようだ。ミレッタは最後にはっきりと言う。「ｃｏｍｐｉｌｅ」
目が眩むような白い閃光。そして次の瞬間には、ミレッタの手に布団一式が丸めて握られていた。まるで魔法だ。
「凄い……」宗は思わず呟いてしまった。
「あんたもできるでしょ。現に……」そこまで言って、ミレッタは宗を見つめる。そして何か――いや、封じていた記憶を思い出したかのように、言った。「いや、何でもない……。とにかく、もう寝るわよ」
二人の間に、それ以上の会話は無かった。
（本当に色々あったな……）

宗は暗い押し入れの中で、これまでの記憶を反芻していた。
森の中でのミレッタとの会話。奇妙な夢。そして三日前の、ミレッタとの出会い。目の前での交戦。クラッカー。ニルという少年。ミレッタに貫通した鉄の杭。イントロダクト・オービス。飛散する血液。
全てが信じられなかった。ここで眠って、目が覚めたら全部夢だった……そうなってほしい が、無理なのだろう。こんなにリアルで長い夢は今まで見たことがない。
何故自分がこんな目に遭う？ 自分はごく普通の高校生、当麻宗だ。運動も駄目だし頭も良くない。何も能力なんて無い、はずだ。

――ならば普通、すなわち現実とは何だ？
「普通は普通だ。こうやって暮らしていたこの日常、それが『普通』。僕がここまで経験したのは全部『異常』だ」
――今まで住んできた世界……、五感で感知できるものが現実だというなら、それは愚かだ。
「何故？ 現実は現実だ。それ以上のものはないよ」
――脳による電気信号の解釈によって踊らされているに過ぎないからだ。与えられた情報を疑いもせずそのまま取り込み、それを現実、普通として認識する……。人ってものは実に安っぽくできているな。
「意味が分からない」
――考えろ。お前が知覚するもの全てを疑え。この世に『存在』するものは、実際は何一つとして無い。全てが、無い。存在の定義を高次元から捉えるとな。
「どういうこと？」
――やれやれ……。
「………」
――見せてやるよ。お前が何なのか。そして、お前に備わっている『力』を。
意識が、飛んだ。

第二話　『イントロダクト・オービス』Bパート後

突然視界が開けた。
路地裏。ここはあの、三日前の路地裏だ。
僕は心臓にあの鉄の杭が刺さったままだった。すぐ前には、血の海の上にミレッタが倒れている。僕を見ているところからして、ミレッタに意識はあるようだった。そしてあのニルも僕の十メートルほど前に立っていた。
やっぱり死んだんじゃないか、馬鹿馬鹿しい。僕はここで死んでいたんだ。
すると僕はいきなり、左胸に刺さった杭を抜き、地面に放り投げた。
そして何かを早口で呟く。何かがおかしい。自分が何を言っているか分からない。考えもしないことを喋っているのだ。口の動きを止めようとしても無理だった。唯一聞き取れたのが、最後の『コンパイル』という単語だけだった。
ニルはかなり驚いているらしい。
『僕』は立ち上がり、
「四年ぶりか。随分乱暴な目覚ましだな」、そう言った。
絶対におかしい。何故だ？　僕はそんなこと考えてもいない。これは僕の体か？　ひょっとして違うんじゃないのか？
……いや、間違いなくこれは『僕』の身体だ。感覚的に分かる。
――そして、動かしているのは僕、ではない。
身体がまるで誰かに乗っ取られたようだった。僕の考えと違うことを喋り、僕の意思と違う動きをする。
「リプログラムか。データでは君はできないはずだけどね」とニルは言った。その顔からは笑みが消えている。『僕』を警戒しているんだ。
そういえば、杭が突き刺さった左胸が直っている。傷一つ、無い

のだ。まるで最初から貫通などしていなかったかのように。更に、ミレッタが内臓に損傷がどうとか言っていた脇腹の痛みも消えていた。――リプログラム？
一体どうなってる？
突然、『僕』は先程のような早口をまた呟いた。やはり何を言ってるかは分からない。この世界のバランスを大きく破壊するような響き。まるでこの世の言葉ではないようだ。
そして、また最後に『コンパイル』と言った次の瞬間、今度は『僕』の手に何かが握られた。
ナイフだ。
しかし量販店でよく見かけるようなナイフでは無い。漆黒の刃が湾曲し、いびつな形状をしている。これは作業用などではない。ただ人を傷つけるため、殺すために作られた、戦闘を主眼においた、ナイフ。それが妖しげな輝きを放つ。
「俺が直々に『原始の海』へと還してやろう、ニル＝アドミラリ」
「原始の海だと？　……何が言いたい！」
そう言うと、ニルはいきなり杭を数本放ってきた。かなり動揺しているらしい。
まずい、かわさなければ――。僕は足を動かそうと試みた。が、『僕』は動こうとすらしない。左手をポケットに突っ込んでのうのうとしている。死ぬ気か。
駄目だ、突き刺さる――、

その瞬間、視界が激変した。飛んでくる杭が、まるで杭では無い。単なる文字だ。僕には単なる二次元の数列の塊が飛んできているように見えた。
『僕』は呟いた。「イントロダクト・オービス、起動完了」
『僕』は凄いスピードで飛んでくる杭を一本止めた。――片手で止めたのだ。
「物質に対する逆コンパイルを実行する」

言うが早いか、『僕』の握った杭が煌めきだした。まるで紅茶に入れた角砂糖のように、微小な結晶となってさらさらとこぼれ落ちていく。それを次々と、全ての杭に実行する。掴んでは消し、掴んでは消し、掴んでは消す。全ての杭が、結晶と化していった。

ニルは愕然としている。

「馬鹿な！」もはや最初の冷静さは完全に消えていた。「物質を消滅させるにはその物質のソースコードを読み取らなければならない筈だ……。いや、まさか……！　お前、その目は……！！」

『僕』は言った。「全ての事象を分析した。もうお前は逃げられない」

ニルは舌打ちをすると、路地裏から出ようと後ろを向く。しかし――、

「無駄だ」

ニルの眼前に壁が出現した。もう路地裏に出口はない。完全なる密室となった。

「空間のフェイズシフト……！」ニルは目を見開いて言った。

「言ったはずだ。お前は逃げられない。――ここで消えろ」

『僕』は走り出した。奴に向けて。

こんなに走るのが気持ち良いのは生まれて初めてだった。それ程速い。時速百キロはあるんじゃないか？

その間にもニルはこちらに向けて何本も杭を放つ。が、僕には杭の軌跡が全て分かっていた。手に取るように。右、左と鮮やかにステップを踏みそれら全てをかわす。

僕は、強い。

ナイフを持ち替え、逆手に構えて――、

飛び散る血飛沫。『僕』は何かを掴んだ。

「ぎぃゃぁぁあぁっぁああ！！」ニルの悲鳴がこの閉ざされた空間で反響する。

――『僕』が掴んでいたのは、ニルの両腕だった。ちょうど肘のあたりから、腕まるごとだ。ニルは、無くなった自分の腕の断面か

ら異常な程吹き出るものを止めることも出来ず、ただ赤い液体を垂れ流していた。

僕は甲高い声で笑った。

「痛いのは嫌か？　死ぬのは嫌か？」『僕』は、痙攣を起こし悶えているニルに向かって言い放った。しかしニルは悲鳴だけをあげ続け、答えることが出来ない。おそらく『僕』の声も聞こえていないんだろう。――つまらない。

「もう飽きた。無へと還してやるよ」

『僕』はニルへとゆっくり歩いていった。奇妙なリズムで震えるその肩に触れ――、

「ｄｅｃｏｍｐｉｌｅ」

ニルは一度だけ、大きく震えた。そして、結晶となった。

跡形もない。何もない。

僕は笑った。狂ったように大声をあげて、笑った。

これが、自分。

宗は理解した。狂っているのは世界ではない。自分だった。

ミレッタは全てを見ていたのだ。だから言えなかった。余りに『異常』だったから。

宗はそれでも自分に話しかけてきてくれたミレッタを、凄いと単純に思った。こんなに狂っている自分に。

――これがお前の力だ。お前の脳にあるジャンクション。それがある条件を満たしたとき、切り替わる。すなわち、この俺が目覚める。その条件が、『死との邂逅』だ。

「僕は狂っているのかな」

――さあな。狂っているのは全てかもな。日常、それ自体が狂っているのかもしれない。本当の真実に誰も気付かないまま馬鹿のように暮らす。この惑星でもっとも高等である、人間すら気付けない。それは仕方がないことだ。『世界樹』の絶対的不可侵な領域だからな。もし気付いたなら、その瞬間――、

「世界が消える」
——そうだ。この世界は実に脆い。だが、お前は無価値な人間とは違う。お前は世界の真実を目にすることが出来る。その為の能力を持っている。
「そんなものいらない！」
——目にしなければいけなくなるさ。いや……、俺がそうさせるだろうし、お前はそうなる運命にある。それがお前の持つ能力の意味だ。
「世界なんていいよ！　僕は普通に生きたいだけなんだよ！」
——それは、無理だ。
嫌な夢だった。本当に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6673b/

こんにちはセカイ

2010年10月9日20時31分発行